

2つの日本語版『マルクス＝ エンゲルス全集』の企画（1928年）

——高野岩三郎とD.リャザーノフの苦闘：コミンテルンと商業主義出版のはざままで

大村 泉

はしがき

- 1 ロシア国立社会＝政治史アルヒーフの高野岩三郎関連文書（F.71,op.50,d.23）
- 2 聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』企画の成立と解消にいたる経緯（概観）
- 3 1928年6月12日付け，K. Omra発信，D.リャザーノフ宛てConfidential書簡（コミンテルン，日本共産党の聯盟版支持）
- 4 改造社版と聯盟版との広告合戦（高野岩三郎，福田徳三，山本實彦，D.リャザーノフの往復書簡，電報）
- 5 D.リャザーノフの基本的立場，高野岩三郎の苦慮
- 6 聯盟5社の「配本遅延広告」，駐日ソ連大使トラヤノフスキーの証言
エピソード

はしがき

筆者は，本誌の第559号（2005年6月号）の特集「戦前期大原社会問題研究所の国際交流」に論考「高野岩三郎とD.リャザーノフとの往復書簡（1928～1930年）」（同誌同号，16～35頁，所収，以下本稿ではこの論考を「旧稿」と略称する）を寄稿し，モスクワのロシア国立社会＝政治史アルヒーフが所蔵保管している高野岩三郎とD.リャザーノフ・旧モスクワ・マルクス＝エンゲルス研究所⁽¹⁾——以下，IMEと略称——所長との往復書簡に即して，日本におけるマルクス主義の普及に二人が果たした役割を考察した。本稿は，この旧稿を，その後入手したコミンテルンやリャザーノフ，改造社社主山本實彦，福田徳三，駐日ソ連大使トラヤノフスキー書簡などによって補正拡充し，両企画の角逐と，そのなかで聯盟版が挫折する過程を，国際的視点から浮き彫りにする。

(1) マルクス＝エンゲルス研究所（Institut für Marx-Engels）はロシア国立社会＝政治史アルヒーフ創立時の前身である。Vgl., D.B. Rjasanov und die erste MEGA: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. Neue Folge. Sonderband 1, Argument Verlag Hamburg, 1997.

1 ロシア国立社会＝政治史アルヒーフの高野岩三郎関連文書 (F.71,op.50,d.23)

昨(2009)年春、筆者は、新MEGAやマルクス／エンゲルス関連文書の蒐集整理で共同研究をし、しばしば手がけているDr. Valerij Fomichev(前記アルヒーフ、マルクス／エンゲルス部門長)に今回の特集企画を紹介し、関連文書の探索を依頼していた。折り返し、高野関連文書が収録保管されているファイルの分類記号名と、同一ファイルに収められている関連文書のリストが届き、しばらく間をおいて、秋にこのファイル所蔵文書全ての撮影データが届いた。以下はこのリスト(全文)である。

Liste des Fonds 71, opis 50, d.23 (以下では、これらの書簡はNr.1, …と記す)

1. 1927年1月4日付け、IME発信、福田徳三宛書簡
2. 1927年1月27日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛書簡
3. 1928年6月12日付け、K.Omra(漢字名不明、モスクワ・コミンテルン本部駐在日本共産党関係者)発信、D.リャザーノフ宛て書簡
4. 1928年1月付け、プハーリン、D.リャザーノフ宛てHosoi(細井?), Kawasaki(川崎?)通知(上記「3」書簡添付物)
5. 1928年4月17日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛て書簡
6. 1928年6月1日付け、D.リャザーノフ発信、福田徳三宛て書簡
7. 1928年6月5日付け、発信者未詳(起草者はEdmundo Peluso?)IME宛て(?)通知(仏文)
8. 1928年6月6日付け、福田徳三発信、IME宛て電報
9. 1928年6月27日付け、山本實彦発信、D.リャザーノフ宛て電報
10. 1928年6月18日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛て電報
11. 1928年6月30日付け、福田徳三発信、IME宛て電報
12. 1928年6月17日付け、山本實彦(改造社社主)発信、D.リャザーノフ宛て書簡
13. 1928年6月27日付け、D.リャザーノフ発信、改造社宛て電報
14. 1928年6月25日付け、高野岩三郎発信、D.リャザーノフ宛て書簡
15. 1928年6月27日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛て電報
16. 1928年6月28日付け、D.リャザーノフ発信、福田徳三宛て書簡
17. 1928年6月28日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛て書簡
18. 1928年7月5日付け、K.Omra発信、D.リャザーノフ宛て書簡
19. 1928年7月5日付け、聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』プロスペクト(9ページ)同上、K.Omra 発信、D.リャザーノフ宛て書簡同封物
20. 改造社版『マルクス＝エンゲルス全集』プロスペクト(英訳)
21. 1928年7月12日付け、D.リャザーノフ発信、高野岩三郎宛て書簡
22. 1928年8月7日付け、Huppert発信、改造社宛て電報
23. 作成時期不詳D.リャザーノフ発信、駐日ソ連大使トラヤノフスキー宛て電報草案(露文)
24. 同上異文(露文)

25. 1928年7月25日付け（推定），駐日ソ連大使トラヤノフスキー発信，D.リャザーノフ宛て書簡（露文）
26. 1928年8月18日付け，高野岩三郎発信，D.リャザーノフ宛て書簡
27. 1928年9月20日付け，ツォーベル発信，高野岩三郎宛て書簡
28. 1928年10月1日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
29. 1928年11月15日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
30. 1928年11月17日付け，S.Nabori（漢字表記，所属不明）発信，D.リャザーノフ宛て書簡（露文）
31. 1928年12月1日付け，ツォーベル発信，高野岩三郎宛て書簡
32. 1928年12月10日付け，高野岩三郎発信，IME宛て書簡
33. 1928年12月29日付け，D.リャザーノフ発信，S.Nabori（同上）宛て書簡
34. 1929年1月10日付け，高野岩三郎発信，IME宛て書簡
35. 1929年1月24日付け，ツォーベル発信，高野岩三郎宛て書簡
36. 1929年1月31日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
37. 1929年2月19日付け，高野岩三郎発信，D.リャザーノフ宛て書簡
38. 1929年2月23日付け，高野岩三郎発信，IME宛て書簡
39. 1929年3月8日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
40. 1929年4月20日付け，大原社会問題研究所発信，D.リャザーノフ宛て書簡
41. 1929年5月10日付け，高野岩三郎発信，D.リャザーノフ宛て書簡
42. 1929年9月19日付け，高野岩三郎発信，D.リャザーノフ宛て書簡
43. 1929年10月12日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
44. 1929年12月27日付け，市川義雄発信，D.リャザーノフ宛て書簡
45. 作成時期未詳，河上肇発信，D.リャザーノフ宛て書簡（露文，写し）
46. 1930年2月9日付け，D.リャザーノフ発信，市川義雄宛て書簡
47. 1930年4月6日付け，高野岩三郎発信，D.リャザーノフ宛て書簡
48. 1930年5月8日付け，D.リャザーノフ発信，高野岩三郎宛て書簡
49. 1930年8月31日付け，プロレタリア科学研究所発信，IME宛て書簡（露文）
50. 19?年9月17日付け，森戸辰男発信，D.リャザーノフ宛て書簡

以上50点の文書のうち，旧稿で言及し，その後大原社会問題研究所のHPで公表している文書は，24点（Nr.2, 5, 10, 14, 17, 26-29, 31, 32, 34-43, 45, 47, 48）である。筆者は，旧稿でこれらの往復書簡が提示する問題として，(1)「内藤赳夫の『日本マルクス主義文献』」，(2)「聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』の企画」，(3)「マルクス／エンゲルスの紛失文書調査」を挙げ，それぞれ立ち入って述べた⁽²⁾。今回筆者が新たに入手したこれら26点の文書が関与するのは，もっぱら上記(2)の問題である。新たに発掘された資料に立ち入る前に，問題の通説的理解を概括しておこう⁽³⁾。

(2) (1)については，久保誠二郎「大原社会問題研究所『日本マルクス主義文献』（未刊行）の意義——戦前期大原社研の国際交流と内藤赳夫の文献目録への取り組み——」，本誌第559号，1-15頁，参照。

(3) 以下は，小泉信三「マルクス全集」（『小泉信三全集第12巻』文藝春秋，1967年，所収），安倍能成『岩波茂

2 聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』企画の成立と解消にいたる経緯（概観）

【発端】

第2次大戦以前に刊行された邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』でもっとも有名なものは改造社版（1928–1935年、全32冊）⁽⁴⁾だが、最終的には日の目を見なかった企画として、1928（昭和3）年に、同人社、弘文堂、希望閣、岩波書店、叢文閣の5社が企画した、いわゆる（5社）聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』があった。

1928年2月1日、岩波茂雄が河上肇の書簡を持参して高野を訪ね、同人社、希望閣、弘文堂の3社のマルクス＝エンゲルス全集の企画を紹介し、岩波も応分の協力することを告げ、高野に協力要請を行った。この企画は、先行していた改造社の構想が拙速不完全であることを理由にしたもので、当時日本におけるマルクス経済学の最高権威と目されていた河上や櫛田民蔵らがこの企画に賛同し、岩波は3社の企画こそわが国学術の発展のためであると信じて、——また岩波書店が改造社とライバル関係にあったことも手伝って——、高野を動かそうとしたのであった。

【3・15事件と企画の再編】

3月1日、高野は大原社研の創立10周年記念事業としてこの全集の編纂監修に当たることを決めた。しかし同年3月15日にいわゆる「3・15事件」が起こり、共産党員とその同調者に対する官憲の全国的な大弾圧が行われ、これによって河上肇は京都帝大を追われ、九州帝大の向坂逸郎、佐々弘雄、石浜知行、東京帝大の大森義太郎らが辞職を余儀なくされた。大原社研も官憲の搜索を受けることになった。搜索は一物の押収すべきものもないという結果になったが、高野は、3月24日、京都で河上に面会して研究所は全集から手を引くことを告げた。数日後、京都の河上から全集計画が破談になったとの報せが入った。

ところが4月10日に、岩波茂雄は、前記3社に岩波書店、叢文閣が加わり、5社が協同して全集刊行に参画することになったとして、高野に全集計画への参画を強く要望した。高野はこの希望を容れ、大原社研は『剰余価値学説史』の翻訳に主力を注ぐことを約束した。計画を進めるうち6月初めには全集の編集そのものを大原社研が引き受けることになった。

【広告合戦】

2つの全集企画は全国紙各紙だけではなく地方紙でも大きく宣伝され、予約購読者が募集された。両企画の宣伝戦は1928年6月に頂点に達した。改造社側はリャザーノフを「マルクス、エンゲルス研究の世界的絶対権威」（河北新報1928年6月25日付第1面、改造社広告）、聯盟側は「斯学の世界的権威」（同、聯盟版広告）と呼び、その支持をもっとも重要なセールスポイントにしていた。リ

雄傳』（岩波書店、1957年）、山崎安雄『岩波茂雄』（時事通信社、1961年）、小林勇『惜襟莊主人——一つの岩波茂雄伝——』（岩波書店、1963年）、大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店、1968年）、『法政大学大原社会問題研究所五十年史』1970年11月（Web版 <http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/50nenshi/50h063.html>）参照。

(4) 改造社版全集については、村田陽一「邦訳ME全集・選集とMEGA」（極東書店『新しいメガ：新マルクス＝エンゲルス全集 Marx-Engels-Gesamtausgabe, 1974』極東書店ニュース別冊、1973年、24–28頁、参照。

リャザーノフの権威を頼りにする点は聯盟側でも全く同一であった。

直接の面識もあり、リャザーノフの高野に対する信頼は絶大なものがあつた。1928（昭和3）年6月23日、改造社版は配本を開始する⁽⁵⁾が、聯盟側はスタートに躓き、5社共同という寄り合い所帯で、しかも12名の翻訳委員⁽⁶⁾が全ての原稿に朱を入れるという方法で翻訳編集を進めたために、その進捗状況は極めて悪かった。

〔聯盟版の瓦解〕

聯盟版は同年7月10日を配本開始日として広告していたが、実現せず、7月31日には岩波が聯盟を脱退し挫折する。これは、社主の岩波茂雄が、配本予定の期限が切れても原稿さえ揃わず全集刊行の見通しが不分明さを増すなかで、聯盟側の他の書店の終始岩波にもたれかかる無責任さに愛想をつかしたからであつたという。高野は岩波の聯盟脱退を思い止まるように苦慮したが、結局9月10日、万策尽きて聯盟版全集計画は完全に頓挫する。

3 K. Omraのリャザーノフ宛てConfidential書簡（コミンテルン、日本共産党の聯盟版支持）

聯盟版の企画成立から消滅に関するこうした通説的理解に対して、今回紹介する一連の文書で特筆すべきは、(1) 共産主義インターナショナル（コミンテルン）および日本共産党の聯盟版への関与、(2) 山本實彦（改造社社主）、福田徳三という改造社版を促進した当事者の証言、(3) 両版の企画を比較考量したリャザーノフの見解の詳細、高野岩三郎の苦慮、(4) 当時の駐日ソ連大使、トラヤノフスキーの証言である。以下、順にこれらを紹介しながら旧稿を拡充・補正しよう。

〔K. Omra書簡〕

聯盟版に対するコミンテルンおよび日本共産党の関与を直接記している文書は、Nr.3, 4, 7, 18, 19, 44だが、なかでも重視すべきは、K. Omra（漢字表記不詳）の1928年6月12日付け、および同年7月5日付けのリャザーノフ宛て書簡（Nr.3, 18）であろう。K. Omraは、コミンテルン・モスクワ本部駐在の日本共産党関係者である。ここでは、まず6月12日付け書簡の概要を立ち入って紹介したのち、この書簡の内容をK. Omraの7月5日付け書簡や、他の関連書簡によって補完し、聯盟版へのコミンテルンおよび日本共産党の関与の特徴を確認しよう⁽⁷⁾。

1928年6月12日付けのK. Omra書簡⁽⁸⁾の第1ページの左肩には、手書きで2行にわたって、The

(5) 東京朝日新聞縮刷版、1928年6月22日付、改造社広告による

(6) 聯盟版翻訳委員の実数は12名を超える。この12名という数値は小林勇前掲書、122頁、参照。

(7) 聯盟版は結局未刊に終わったが、その全体構想や改造社版との違い、等については、本特集の久保誠二郎論文、25-37ページ、を参照。

(8) 本書簡はタイプによる。総計5ページだが、手書きの署名がなく、ところどころにタイプの打ち損じがあり、日本人なら間違わないと思われる日本語名称、たとえばKibokakuと打つべき箇所がKibokatuになっているのを訂正するなどしている。元原稿は手書きであって、研究所で手書き原稿から写しが作成されそれが保管されたのであろう。市川義雄の1929年2月29日付けリャザーノフ宛て書簡はオリジナルとタイプの写しが双方共にアルヒーフで保管されている。

Marx Engels Institute/ To Com. Ryazanovと記され、右肩に Confidential とタイプで刻印され、下線が引かれ、Concerning the Japanese editions of works of Marx and Engelsというタイトルがあり、次のような本文が続いている。

日本共産党は1926年にマルクス／エンゲルス著作の翻訳を企画し、翻訳権の取得を請求した。同時期、党出版社の希望閣がマルクス／エンゲルスの著作をマルクス・エンゲルス政治論叢書（原文Marx Engels Bibliothek）として逐次刊行しており、訳者は党の同志である。知識人同志の幾人かは他の出版社からもマルクス／エンゲルス著作の翻訳を出版している。

「1927年末頃、マルクス／エンゲルス著作の日本語版計画が完成した。特別委員会が結成された。同志諸君がまだ日本語になっていないマルクス／エンゲルス著作の日本語訳を開始した。同時に党は同志ブハーリンおよび同志リャザーノフに、目下刊行中の、マルクス／エンゲルス著作国際版〔旧MEGA第I部門第1巻を指す－引用者〕の翻訳権取得を願い出た（同志Hosoi、同志Kawasakiの書簡写し、参照）。」

党出版社の希望閣は日本語版全集の計画をアナウンスし、著名なマルクス主義経済学者、河上肇博士や大原社会問題研究所の研究者に計画のサポートを依頼した。同志佐野学や同志西雅雄は日本語版の編集主任となるべき人物であり、十分その資格をもっていた。両名のほかにも多くの党の知識人同志がこの事業に協力する手はずになっていたし、全集の需要についても十分見込める下地が日本にはある。

丁度そのとき、急に改造社が同じ企画を打ち出したのであった。この企画は「多数の社会民主主義者、とりわけ中央派（centrist）や党を離れた清算主義者（liquidator）を引きつけ、我々の計画と競争を始めた」。

7. Com. Ryazanov, CONFIDENTIAL

Concerning the Japanese edition of the works of Marx and Engels.

Comrades!

Already in 1926 the Communist Party of Japan planned to translate and publish the works of Marx and Engels and the party asked for the right of translation to be granted. (The letter to the Marx-Engels Institute, Oct 17th 1926). At the same time, the publishing ~~XXXXXX~~ Company of the Party, "Kibokatu" began to publish a number of books by Marx and Engels in the form of the Marx-Engels Bibliothek. They were translated by party Comrades. A number of intellectual party Comrades translated other works by Marx and Engels and published them through other publishers.

By the end of 1927, the plan of the Japanese edition of Marx and Engels was completed. A special commission was formed. Comrades began translating those of the works of Marx and Engels which had not been translated in to Japanese. At the same time the Party applied to Comrades Bucharin and Ryazanov for the right of translation of the International Edition of Marx-Engels, which is now being published (See copy of letter of Com. Hara and Kawasaki).

Our publishers "Kibokatu", announced the plan of the Japanese Edition, and began to speak to Dr. Kawakami, a noted Marxian economist and to the members of the Ohara Institute of Social Problems, about their support to our works.

Comrades M. Sano and M. Nishi should be the chief editors of the Japanese edition. ~~Now~~ I feel bound to give a few characteristics of the two comrades. Com. M. Sano is a learned Marxian. He was once professor to the Waseda University in Tokyo. He entered the party in 1923, and came to Russia in 1923 owing to the Communist raid. He attended the Vth Congress of the Comintern. Since 1925 he was one of the most active workers and leaders of our party. Concerning his literary work, he has written a number of books, especially on Japan. He translated "The Critic of Political Economy" by Marx and some of the works of Lenin. Com. M. Nishi was the editor of "Shakaishugi-Kenkyu" (study of socialism) since 1921. Subsequently he was the editor of t

1928年6月12日付け、K. Omra発信、IME宛て書簡、第1ページ

この間、希望閣側は、河上博士や大原社研に声をかけ、大原社研は企画に対する積極的関与と支援を約束した。他方、3月15日に1000人もの左翼労働者活動家に対する大弾圧があり、同志西は逮捕され、獄舎に囚われの身となった同志佐野を含め党の指導部は地下活動を余儀なくされ、希望閣社主の同志市川も逮捕投獄された。「こうして計画は中断したのだが、間をおかずに希望閣は計画を拡大し変更した。政治的ならびに警察対策から、彼らは著名なマルクス研究者を前面に押し出すことにした。そして5月末には、5社からなる『マルクス／エンゲルス全集刊行聯盟』によってマルクス／エンゲルスの著作が出版されるという広告が新聞紙上に現れた」。

この全集は、3部構成（著作、『資本論』および『剰余価値学説史』、書簡）で、編集委員は、河上、櫛田、大山、森戸、そして高野である。全20巻からなり、1928年6月に配本を開始し、1930年1月には完了予定という。大原社研の高野や櫛田はモスクワを訪問したことがあり、『剰余価値学説史』は大原社研で翻訳をするが、これは分冊で1925年から刊行されている。『資本論』の翻訳は河上が担当する。これも昨年から刊行が始まっているが、英訳を遙かにしのぐ翻訳と思う。

「数日後、改造社が『マルクス＝エンゲルス全集』（これも20巻で、1巻1円）の広告を打った」

改造社版の中心メンバーは、大半が中央派グループだ。「社会思想」の同人は日本の若手カウツキー主義者のグループだ。トップの一人河野は日本の中央派である「日本労農党」の指導者であり、嶺山は徹底した反共理論家だし、山川、堺、猪股などの党を離れた清算主義者もいる。最後に来るのは有名な日本のファシズム指導者、高島であり、彼が『資本論』を翻訳する。

聯盟版と改造社版の違いは誰にでも分かる。第1は編集陣、第2に訳者、第3に出版社の違い。「改造社はその無責任な宣伝出版で有名だ。改造社が出したブハーリンの『史的唯物論』の翻訳は誤訳の見本と言われている」。「大原社研、教養あるマルキストVs『社会思想』同人の中央派グループ、著名なマルクス経済学者Vsファシストのリーダー、自己犠牲的党活動家Vs清算主義者グループ」。違いは明白だ。

「問題は明白！私は次のことを具体的に提案したい。

1. 翻訳権を『マルクス／エンゲルス全集刊行聯盟』に与え、改造社の要求を拒否すること。
2. 道徳的かつ物質的支援がマルクス／エンゲルス研究所によって聯盟版に供与される必要がある。
3. 同志リャザーノフが日本語版に序文を寄稿することが賢明と思われること。
4. わが同志諸君を鼓舞するために、もし可能なら、日本のマルキストたちによって計画された『マルクス／エンゲルス全集刊行聯盟』の事業にマルクス／エンゲルス研究所がシンパシーをもつことを公表すること、そしてこのことが必要な道徳的支援となるだろう。」

日本のマルクス／エンゲルス、レーニン文献の翻訳リストを添付する。

「研究所が私の提案を受け入れ、わが同志諸君への支援に同意されることを期待する。

共産主義者の挨拶をもって K. Omra

[19] 28年6月12日」

[コミンテルン・日本共産党と聯盟版]

以上、直接引用も含め、いくぶん長く書簡の概要を示した。ここでは次の2点を述べておく必要がある。第1に、本書簡の趣旨は非常に明確であって、目的は、リャザーノフを所長とするIMEの聯盟版への支持取り付けである。だが、K.Omra書簡は、リャザーノフから聯盟版への支持取り付けだけを要求しているのではない。改造社の要請を拒否することも要請している⁽⁹⁾。ここにこの書簡の最大の特徴がある。

コミンテルンは、1924年7月7日、第5回大会で、各国共産党と協力して、それぞれの国でマルクス/エンゲルス著作選集を刊行する必要があるという決定を行っていた⁽¹⁰⁾。本書簡が言う1926年および1927年末における、日本語でマルクス/エンゲルスの著作を刊行する企画は、この決定の延長線上にある。リャザーノフに宛てた、7月5日付けK.Omra書簡によれば、この出版計画、特に1927年に策定された計画は、国際共産主義運動を東アジアで活性化するというコミンテルン（日本共産党）の革命戦略の一環として構想されたものであって、党出版社である希望閣によって具体化され、財政的基盤を強固にするため、同人社、弘文堂と共同で（jointly）日本語版を出版することにし、「最初の計画では、別々に（seperately）マルクス／エンゲルスの多様な著作を出版する」ことになっていた。ところが「そのとき、急に『改造社』という巨大なブルジョア出版社が、マルクス／エンゲルス著作の日本語での刊行計画を発表した」。改造社の計画に参加したのは、中央派や党を離れた清算主義者であった。「われわれの出版社（publishers）は、改造社に協力の申し入れをしたが、改造社は1ヶ月間沈黙を守ったあと」、「提案を却下した」。

このように、7月5日付けK.Omra書簡は、上記6月12日付け書簡の対応箇所の趣旨を補完し、聯盟版がコミンテルンと日本共産党の意向を受けたものであり⁽¹¹⁾、改造社の企画はコミンテルンや

(9) IMEは、改造社版ではなく、聯盟版を支持すべきである、というのはコミンテルン上層部も確認していた方針とみてよい。これを示唆するのが、1928年6月5日の日付がある差出人、また起草者および宛先不詳の仏文通知である。ここでは、改造社版のIMEへの売り込みに努めた福田徳三の要求をきっぱり断り、改造社とIMEとの連繋を拒否し、日本共産党の申し入れを受け入れることが強く要請されている。起草者は、コミンテルン極東部門書記のSchubinと相談したと明記している。IMEやD.リャザーノフに関する歴史研究の第一人者の一人であるRolf Hecker教授（ベルリン・MEGA刊行促進協会理事長）に問い合わせたところ、この仏文書簡の起草者は当時IMEの海外部門編集者であったEdmundo Pelusoの可能性があり、とのことであった。この場合、通知の宛先はIMEではなく、D.リャザーノフ本人であった可能性がある。

(10) コミンテルン決議：「マルクスとエンゲルスの著作・書簡全集の刊行についての決定」村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第3巻、大月書店、1980年、128頁、所収、参照。

(11) K.Omraが党出版社と呼ぶ希望閣の社主、市川義雄書簡は、1929年12月27日付けのものだが、ここでも改造社版の計画と聯盟版の計画とが「同時期（the same time）」に成立したと記されていて、コミンテルン（日本共産党）関係者の目には、聯盟版の出現経緯から、改造社版の「後追い」という意識はなかった可能性がある。前節で紹介した1928年2月1日の岩波茂雄の高野訪問では、岩波はこの時点で既に『マルクス＝エンゲルス全集』刊行への参画に相当強い関心を有していた様子だが、同書店および叢文閣は企画に加わることは確定していないので、希望閣（＋同人社、弘文堂）側からの改造社への申し入れが、実際あったならば、同年2～4月期であろう。1928年6月25日付け、高野岩三郎発信、リャザーノフ宛て書簡（Nr.14）で、高野は、同じ全集を2つ同時に競争して出すことの愚を避けようと努力した、と記していて、この申し入れがあ

日本共産党と対抗関係にある社会民主主義者、中央派、清算主義者の影響下にある企画であることを再度強調し、リャザーノフが改造社版を支援したりすることがあってはならないとするのである⁽¹²⁾。

第2に、ここで指摘しておくべきは、K. Omra書簡が、一部事実と反する点である。上記書簡では、1928年5月末に聯盟版の広告が新聞紙上に現れたあと、「数日後、改造社が『マルクス＝エンゲルス全集』の...広告を打った」とし、前後で改造社版翻訳者への批判・論難を行っていて、文脈から、改造社の『マルクス＝エンゲルス全集』構想が、聯盟版よりもあとから、広告されたかのよう⁽¹³⁾に記され、書簡の読み手は、改造社版が聯盟版の二番煎じであるかのような印象を持たされる。これは7月5日付書簡でも全く同断。しかし事実と反する。改造社版の広告初出は1928年5月12日であり、その後、5月18日、5月25日にも出ていて、聯盟版の広告初出は5月23日であった。

また、二つの広告を見比べると、聯盟版の編集委員5名のうち、高野岩三郎、森戸辰男の名前は改造社版の翻訳担当者にもあり、聯盟版の翻訳委員に名前が挙がっている宇野弘蔵と久留間鮫造の名前もやはり改造社版の翻訳担当者になっていることが知られる⁽¹⁴⁾。K. Omraの6月12日書簡は、こうした「相乗り」には全く触れるところがない⁽¹⁴⁾。後に明らかにする高野自身の証言（Nr.14）から知られるように、この「相乗り」は、改造社版の企画が聯盟版に先行し、翻訳の依頼があり、高野や森戸が— おそらく久留間と宇野も — 断り切れない事情から承諾したことから生じたものであった。成立経緯からすれば、コミンテルンや日本共産党関係者には、聯盟版は改造社版から独自に、先行して企画された1926年の出版計画に出発点があると言えるが、1926年の、またそれを発展させた1927年の企画も「全集」ではなく、岩波などの大手出版社が関与して「全集」企画は初めて実現可能になったのであって、K. Omraの改造社版関係者への論難は客観性に欠ける側面がある。

4 改造社版と聯盟版との広告合戦（高野岩三郎、福田徳三、山本實彦、リャザーノフの往復書簡＝電報）

〔小泉信三の証言〕

「改造社および岩波外四社の所謂聯盟版マルクス＝エンゲルス全集の対抗は、始めから、必ず不

った可能性は十分ある（後述）。

(12) 良く知られているように、1920年代末から1930年代初めに、コミンテルンでは社会民主主義とファシズムとを同列に置き、共産主義者の社会民主主義者との協力・統一行動を否定し、共産主義者の主要な打撃を社会民主主義者に向ける社会ファシズム論が支配的であった。こうした共産主義運動における当時の国際動向が、この日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』の翻訳編集にも大きな影響を及ぼしていたというべきであり、K.Omra書簡はまさにその証左と言えよう。

(13) なお、改造社版の広告間で翻訳責任者、翻訳担当者の名簿は必ずしも一定しない。

(14) K. Omraの7月5日書簡は聯盟版の詳細を明らかにしたいへん有益だが、そこでは、聯盟版および改造社版の企画の関係はさらに単純化して捉えられ、改造社版には東洋でのマルクス主義の普及という崇高な目的などなく、もっぱら金儲けが主眼である、と断じた後、翻訳者について触れ、われわれのような「闘うマルキスト（fighting Marxists）」の多数が虜囚の身であり、たいへん困難だが、しかし、「われわれは、改造社の如き反動的分子と協力しようという気にはなれない」とも記されている。

愉快な馬鹿げた光景を演出するだろうと思われたが、果たして予想の通りで、新聞広告、張り紙、立て看板、宣伝ビラの競争は日を追うて激甚となり、互いにケチを付け合い小汚く当てこすり合う」⁽¹⁵⁾ 事態となった。「同一の著作物のしかも同一の手本——リャザーノフ編輯マルクス＝エンゲルス全集——に拠って編纂したものをもって、同一の顧客を争奪するということになれば、こういう結果を見るのは当たり前である」⁽¹⁶⁾。

これは、小泉信三が『三田文学』の1928年8月号に寄稿した「マルクス全集」の書き出し部分である。当事者やその周辺は別にして、改造社と聯盟5社の対抗は、このような印象を当時多数の、ことに当事者から一定の距離を置く、知識人や読者に与えたであろうことは想像に難くない。しかし、企画が大きければ大きいほど、事柄が同一顧客の「争奪」戦であるので、当事者には、一方がギブアップするまで、徹底的に闘い抜く以外に選択肢はなかったことも確かであろう。

〔改造社の戦略と広告合戦概観〕

当時、『太陽』、『中央公論』と並ぶ、もっともポピュラーな月刊誌の1つといわれた『改造』を擁し、出版界の一方の雄であった改造社であっても、聯盟版のバックには日本共産党そしてコミンテルンがあり、聯盟版のトップ、高野と櫛田は、翻訳底本の版權を有するIME所長、リャザーノフと昵懇の間柄であり、また当時日本国内で最も著名なマルクス研究者であった河上が『資本論』の翻訳者であったこと、さらに希望閣のような弱小出版社だけではなく、岩波書店および弘文堂という、当時左翼文壇の一翼を担っていた大手出版社も聯盟5社に加わっていたこと、これらは脅威であったに違いない。だからこそ、改造社は一方で、(1)当時の駐日ソ連大使トラヤノフスキーや「翻訳担当者」右筆頭の福田徳三を介してリャザーノフに接触を図り、(2)「實物が一切を解決す」(1928年6月24日付け、同社広告、キャッチコピー)、とばかりに聯盟版よりも一刻も早い翻訳刊行に全力をあげ、(3)同時に徹底した広告合戦に打って出ることによってこの競争に勝利しようとしたのであろう。

両者共に、売り物の『マルクス＝エンゲルス全集』は全巻予約販売（いわゆる円本時代を反映して、全巻1冊1円、両者共に全20巻）であった。東京朝日新聞の広告欄を見ると、改造社の広告は、1928年5月12日に開始され、7月10日に予約募集を締め切るまで総計14回（5月3回、6月7回、7月3回）にも達する。聯盟5社も、5月23日に開始し、同年7月14日に敗北宣言に等しい配本遅延の広告を打つまで総計6回あった（5月2回、6月3回、7月1回）。旧稿で写真を含めて紹介したように、仙台周辺を地盤にする河北新報でも、この広告はしばしば第1面トップに掲載されているので、1928年5月半ばから7月初旬にかけ、同種の広告は全国各紙の紙面を飾ったと思われる⁽¹⁷⁾。

(15) 小泉信三、前掲書、471頁。

(16) 同上。

(17) 先行した改造社の広告の変容に着眼すると、聯盟版の広告が出てから、日をおかずに、改造社は、聯盟版と同様、「申込金不要」等、を広告し、内容的にも「大増補と大附録（書簡集全部収容、マルクス/エンゲルス傳、総索引、解題と写真）」を提示するなど、聯盟版の企画を取り込んでいる。小泉は、このことを、皮肉を込めて、両者の「競争の利益の一つに数うべきもの」（小泉、前掲書、472頁）と呼んでいる。これを小泉の「皮肉」というのは、小泉は、直後で、競争の余り「編纂が杜撰となり」、「翻訳が屢々未推敲のままで発表」される可能性、というよりはむしろ蓋然性に言及しているからである（同上書、473-474頁、参照）。蓋

〔福田徳三の懇願〕

聯盟5社と改造社との広告合戦が頂点に達するのは、1928年6月半ばであった。双方が最も頼りとしたのは、リャザーノフであった。意外だが、聯盟側でリャザーノフの支持取り付けに奔走し、企画の紹介に努めたのは、親交のある高野岩三郎や社運をかけた聯盟5社のトップではなく、K. Omraらコミンテルン関係者であった。改造社側で先頭に立ったのは社主山本實彦であった。山本は、駐日ソ連大使トラヤノフスキーやリャザーノフと一定の親交があった⁽¹⁸⁾ 福田徳三を介し、さらに自ら書簡（Nr.12）を起草して、リャザーノフの支持確保に乗り出した。

最初にリャザーノフと連絡を取ったのは福田徳三であり、時期は1928年5月であった。というのは、1928年6月1日付け、リャザーノフ発信、福田宛て電報（Nr.6）は、「書状なしには、私は照会に答えることができない、至急正確な情報を送って欲しい」と述べているからである。福田の「照会（Anfrage）」の内容はこの「照会」そのものが伝承されていないので全く不明だが、何らかのアクションが5月にあったと見るべきであろう。リャザーノフのこの電報による問い合わせがあったからか、福田徳三は、1928年6月6日、モスクワの研究所に宛てて電報（Nr.8）を打つ。

福田は、ここで電報を受け取ったことに謝辞を与えた後、改造社版の第一巻の印刷配本が間近に迫っていることを告げ、是非ともリャザーノフの『マルクス＝エンゲルス全集』（旧MEGA第I部門）第1巻の附録（Beilagen）や、校訂（Verbesserung）、脚注（Fussnoten）を改造社版で使うことに対する書面による許可が欲しい、というのは、近刊予定の改造社版ではこれらを使っているからだ、と懇願している。そして末尾では、このための謝礼として、既に改造社は、5月23日付けで駐日ソ連大使の助言により、441ルーブルを送金している、詳細は福田自身の書簡を見るように、とこの電報を締めくくっている。

〔改造社広告〕

改造社は1928年6月14日、「配本近し」を枕に置き、広告半ばの「先驅者の率先的計畫」と題した解説的記事の末尾に「（近く驚くべき報導をなすべし）」と謎めいた一句を挿入した。

6月18日の広告では、この「驚くべき報導」として次の記事が現れた。

「世界一完璧な全集（タイトル）マルクス、エンゲルス研究の世界的絶対權威、マルクス、エンゲルス研究所長リャザーノフ氏は彼の監修せるマルクス＝エンゲルス全集モスクワ版第一巻にさへ這入らなかつた補足材料を提供して改造社全集に援助する旨の電報に接す。これで改造社版全集は世界に比なき完璧無比のものとなつた。各階級諸賢の熱烈な支持を期待す。」

〔リャザーノフと高野の往復電報〕

6月14日の予告とこの広告は聯盟側を大きく動揺させることになった。だが6月18日付け広告が全国各地の新聞紙面で公表されたまさにその日に、リャザーノフから高野に宛てて次の電報が入った⁽¹⁹⁾。

し、正論と言うべきであろう。

(18) 1927年1月4日付け、マルクス/エンゲルス研究所発信、福田徳三宛て書簡（Nr.1）では、福田のリャザーノフへの献本が話題になっている。

(19) この電報をリャザーノフが高野に送るきっかけは、前掲K.Omraの6月12日付け書簡、および14日前後の

KAIZO-SHA
(THE PUBLISHER)
SHIBASAKI, ATAGOBINTACHO
TOKYO, JAPAN.

17. Juni 1928

Hochgeehrter Herr Professor Rjzanovi!

Ich habe danktuehelt gehoert, dass Sie fuer die bei mir vorlegten gesammelten Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels Genehmigung an Herrn Prof. Spalvink bei der Russischen Botschaft gegeben haben, darum ich Sie mit Telegrammen durch den Russischen Botschafter, seine Exzellenz Trojansky, Herren Professoren Spalvink und T. Fukuda gebeten habe. und besonders die Mitteilung, dass Sie die Gute haben, uns verschiedene Materialien zu geben, haben wir, ich und unsere Herausgeber, mit dem besten Dank und der hoechststen Freude erhalten. Wir hoffen, dass wir jetzt mit Ihrer wertigen Hilfe die besten, sowie moeglich im heutigen Japan vollstaendigen gesammelten Schriften von Marx-Engels herausgeben koennen.

Erlauben Sie mir, etwas vom Verleger, Kaizosha und unserem Plan der gesammelten Schriften von Marx-Engels zu sprechen.

Der Verleger, Kaizosha ist der eine von den groessten Verlegern in Japan und verlegt da unter meiner Leitung die monatliche Zeitschrift, Kaizo ("a monthly review of politics, literature, social affairs, etc."), die die groesste einflussreichste Zeitschrift in den fernem orientalischen Laendern ist. In dieser Zeitschrift erscheinen verschiedene Artikel von den besten Denkern und Schriftstellern in der Welt. Herr H. Barbusse schreibt auch fuer die Zeitschrift nicht so selten. und auch die Artikel von Herren A. Joffe, Pilnyak, und Sen Katayama konnten wir fuer sie bekommen. Fast alle Schriftsteller und Denker der linken Richtung in Japan geben dieser Zeitschrift ihre besten Beitrage. Unter diesen

KAIZO-SHA
(THE PUBLISHER)
SHIBASAKI, ATAGOBINTACHO
TOKYO, JAPAN.

Verhaeltnissen bin ich darauf stolz, dass wir grossen Beitrag zur japanischen geistigen Entwicklung leisten koennen werden. Seit langer Zeit habe ich die gesammelten Schriften von Marx-Engels geplant, weil ich gedacht habe, dass es meine Pflicht ist, mit dem Denken von Karl Marx und Friedrich Engels, den absoluten Autoritaeten der Gesellschaftskritik, das japanische Volk vertraut zu machen, besonders unter heutigem japanischem Zustand, damit es die Grundlage seiner Selbstkritik erfassen koenne.

Unsere Herausgeber und Uebersetzer sind die Elite von den besten Denker der linken Richtung in Japan und die altbekannten kommunistischen Fuehrer, z.B. K. Yamakawa, T. Inomata, T. Sakai usw.

Ich habe an Ihres Institut 442 Rubel geschickt und moechte noch weiter schicken. Ich bitte Sie daemum, dass das Marx-Engels-Institut unter Ihrer Leitung die Gute hat, uns damit die unbekannten Materialien und die verschiedenen seltenen Photographen zu geben.

Ich habe gleichzeitig das Inhaltsverzeichnis unserer gesammelten Ausgabe gesandt.

Mit besten Gruessen

Ihr ergebener

Sanehiko Yamamoto

Der Besitzer von Kaizosha

1928年6月17日付け、山本實彦発信、D.リャザーノフ宛書簡全文。

「貴殿はいずれの『マルクス＝エンゲルス全集』を支持し編集せらるるか？電報および書簡で知らせて欲しい リャザーノフ」

改造社の広告に圧倒され落ち込んでいた高野ら聯盟側関係者は、このリャザーノフの電報に欣喜雀躍して早速次の電報を返信した。

「私が所長である大原社会問題研究所は、改造社版ではなく、聯盟版を支持し、編集する。
アトフミ 高野」

〔1928年6月17日付け、山本實彦書状および電報〕

リャザーノフが6月6日付け福田の電報（Nr.8）に返信した記録は残っていない。他方、6月27日付けの改造社社主山本實彦のリャザーノフ宛て電報（Nr.9）、および書簡（Nr.12）によれば、リャザーノフは個人的に駐日ソ連大使館付きのProf. Spalvingkに連絡し、改造社の提案を受け入れた、というのである。山本はこのリャザーノフ宛て6月17日付け書簡の冒頭で次のように謝辞を述べている。

「尊敬するリャザーノフ教授殿

私は、感謝を込めて、貴殿が、弊社で公刊しているカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの著作全集のために、私が、ロシア大使トラヤノフスキー閣下、Sparvingk教授および福田徳三教授を介して、電報で貴殿にお願いしていた件につきまして、ロシア大使館付のSparvingk教授に対して、許可（Genehmigung）を与えて下さったことをお聞きすることになりました。私たち、すなわち私と私どもの編集者とは、とりわけ、貴殿が私どもにさまざまな諸資料を提供して下さいというお申し出のご伝声を、深甚なる感謝と至福の思いで拝受致しました。私どもは、今や貴殿のご援助を頂くことで、最良の、そして現在日本国内で集めうる限りの完全なマルクス／エンゲルスの著作集を出版できることを、期待しております。」

山本はこの後、改造社がソ連の研究者の業績やマルクス／エンゲルス著作の普及にいかに関心をもち取り組んでいるかを述べ、後段では次のように述べている。

「私どもの編集者ならびに翻訳者は日本における左派知識人のエリート層であり、良く知られている共産主義的指導者（altbekannten kommunistischen Führer）、たとえば、山川均、猪股都南雄、堺利彦がいます。

私は貴研究所に既に442ルーブル⁽²⁰⁾を送金してございますが、さらに多くの金子を用立てさせて頂こうと思います。貴殿の指揮下にあるマルクス／エンゲルス研究所が、私どもに未見の諸資料とさまざまな入手しがたい写真を提供して下さいことを、切にお願い申し上げます。」

Prof. Spalvingk（後述）とリャザーノフとのやりとりではなかったかと思われる。筆者が今回入手したK.Omraの6月12日付け書簡には、受領日のゴム印がないが、7月5日付け書簡にはあり、7月7日となっていて、K.Omraの6月12日付け書簡は14～18日には書簡は到着しており、リャザーノフは、まず高野に直接確認しようと考えたと推察されるからである。旧稿では高野の関与を想定したが、物証がなく、このように考えるべきであろう。

(20) 福田の電報では441ルーブルと記載されている。これは、当時の為替相場を勘案すると、日本円で500円に相当する。

[リャザーノフの激怒]

この書簡がリャザーノフの手許に届いたのは、1928年7月3日だが、同趣旨の内容を手短に記した次の電報（Nr.9）が、その先に（おそらく日付通り1928年6月27日に）入った。

「貴殿の親愛あふれるお許しに深甚より感謝申し上げます。このお許しは、改造社によって編集されているマルクス／エンゲルス著作全集のために、トラヤノフスキー閣下およびSpalvingk, 福田両氏を介してお願い申し上げていたものであり、貴殿がSpalvingk氏にお示し下さったものです。私どもは貴殿の価値あるご援助の下、全力で著作集刊行に努める所存です。私どものこの試みに対して、貴殿のメッセージをお願いすることはかなわないでしょうか。改造社。...」

これにリャザーノフは激怒した。直ちにリャザーノフは同日、6月27日付けで下記の電報（Nr.13）を改造社に送った。

「私は許可など全く何も与えていない。明らかに誤解だ」

同時に、リャザーノフは、同日付で、高野に対して次の電報（Nr.15）を打ったのである。

「私は『聯盟版』を認証する。アトフミ」

改造社に対するリャザーノフの激怒電報に返電したのは社主山本實彦ではなく、福田徳三であった。福田はこの6月30日付けの返電（Nr.11）で、リャザーノフの側に誤解があり、この誤解はわれわれ（山本および福田）の電報のドイツ語訳が不正確だった（nicht korrekte Übersetzung）からだとした上で、改造社版のために資料提供を重ねて要求し、「そのために暫定的に約900ルーブル（Neunhundert Ruble）を電送した」とまで伝えたのであった。

5 D.リャザーノフの基本的立場、高野岩三郎の苦慮

自分たちの電報の誤訳⁽²¹⁾問題を前面にたて、「誤解」はリャザーノフの側にあるとし、最後はさらに金を送ったから資料を寄越して欲しい、という福田の返電に學術の匂いは皆無であって、商業主義そのものというほかないが、リャザーノフは、翌日、1928年6月28日に、次の書簡（Nr.16）を福田に送っている。この書簡でリャザーノフは、福田の献本に感謝するとともに、注記では外国語文献が多数引用されており、内容を知りたいが、世界言語ではない日本語で書かれているため、せめて英文のレジュメがあれば、と思うと記した後、次のように続けている。

[リャザーノフ書簡]

「私は、日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』について昨日しばらく考えたあとで、結論に達しました。貴殿も既にご存じでしょうが、私は改造社版を認証せず、聯盟5社の企画を認証します。その際、私にとって決定的であったのは、聯盟5社の企画は、編集および翻訳に参加する大原社会問題研究所およびその所員によって支持されている、という事情です。

(21) 福田と山本の電報は、特に山本の6月27日付け電報の後半は、文意が伝わらない虞があるが、ドイツ語の善し悪しはともかく、6月5日付け、福田発信電報も、この6月27日付け山本電報の前半も、文意が分からないものではない。

Nr. 752

3591 Aug. 68

28. Juni 1928.

Herrn

Professor Iwasaburo Takano,

Professor Chiba Institute of Social Research,

Osaka, Japan.

Sehr geehrter Herr Kollege,

Mit bestem Dank bestätige ich den Empfang Ihres Telegramms, worin Sie mitteilen, dass Sie die alliierte Ausgabe der Werke von Marx und Engels unterstützen und an deren Bearbeitung teilnehmen. Dieser Umstand war für mich entscheidend. Ich habe Ihnen gestern telegraphiert:

"Ich autorisiere 'Alte Ausgabe' stop Brief folgt"

Mit diesem Telegramm wollte ich schon klare Lage schaffen. Auf die Einzelheiten der weiter zu unternehmenden Schritte will ich heute noch nicht eingehen, ich möchte vorerst Ihren angekündigten Brief erhalten und dann möchte ich den genauen Plan der alliierten Gesamtausgabe zu Gesicht bekommen.

Schon jetzt will ich aber betonen, dass ich ausser der Autorisation dieser Ausgabe, die gewissermaßen eine moralische Unterstützung darstellt, auch meine editoriale Unterstützung zu geben gedenke. Wenn ich den ausführlichen Plan sehen werde, werde ich wohl in der Lage sein, dazu ergänzende Vorschläge zu machen. Es gibt gewiss noch zahlreiche für Japan und für den Orient besonders interessante Schriften von Marx und Engels, die zwar schon seinerzeit gedruckt wurden, doch heute ganz vergessen und unbekannt sind. Ausserdem gibt es im Manuskript erhalten gebliebene Schriften, die noch nicht veröffentlicht worden sind und die für eine so grosse Ausgabe meiner Ansicht nach unentbehrlich sind. Ich hoffe, im Laufe unserer weiteren Korrespondenz, im Verlaufe der nächsten 1-2 Monate, mit Ihnen

Blatt 2

bezw. mit dem Chara-Institut und mit dem alliierten Verlag die Wege und Mittel zu klären, durch welche ich das notwendige Material der Ausgabe zukommen lassen kann.

Ich erwähne nur nebenbei, dass es mir schon nach dem Erscheinen des ersten Halbandes der deutschen Gesamtausgabe gelungen ist, einem dicken Gedichtband des jungen Marx auf die Spur zu kommen. Es sind dies nicht jene Gedichte, die schon Mehring gekannt hat und die jetzt verschollen sind. Diese sind etwas später entstanden, obwohl noch im Jahre 1837, und sie enthalten nicht nur Liebeslyrik, ja der Band enthält sogar ausser lyrischen Versuchen auch Bruchstücke eines Romans und eines Akt eines Dramas. Für den geistigen Bildungsgang von Marx finden sich hier viele wertvolle Anhaltspunkte. Um nur ein Moment zu erwähnen: Hegel wird hier noch öfters mit dem Epitheton "Der Zwerg" ausgezeichnet!

Mun genug für heute. Ich sehe Ihren Mitteilungen mit grossen Interesse entgegen. Ich habe keine Antwort erhalten auf meinen Brief vom 17. April d.J. Wenn es Ihnen möglich ist, darauf zu antworten, wäre es mir sehr angenehm, wenn nicht, bitte ich auch in diesem Falle um irgend einen Hinweis darauf.

Mit den verbindlichsten Grüssen

Ihr ergebener



1928年6月28日付け、D.リヤザーノフ発信、高野岩三郎宛て書簡全文。

私は、改造社版の先を見通した詳細なプロスペクトを、また貴殿が電報で予告された詳細な書簡を、鶴首致しておりましたが、空しく終わりました。私は、日本語版全集を積極的に支援する用意がありますし、あなた方に多数の、一般には未公表の、マルクス／エンゲルスの著作を翻訳のために自由にして頂こうという意志があるので、私には、——この点で、貴殿が私と同意見であることを切望しておりますが——私、ないしはこうした文献的・学術的案件に関わるマルクス／エンゲルス研究所が、商業的企業の一つ（einer Geschäftsfirma）とではなく、学術的研究機関の一つ（einem wissenschaftlichen Institut）と——この場合には、貴殿もご承知のように、私が先年来多くの研究員と旧知の間柄である大原社会問題研究所と——協力することになれば、たいへん好都合です。

貴殿が大原社会問題研究所と同じような企画を支援されていることは私には喜ばしいことです。そもそも、貴殿がこのような重要な案件で大原社会問題研究所と協力できない、ということがどうして生じるのか、私には驚きです。私が日本の諸事情にまさに疎い、ということなのでしょうか。

ともあれ、実にたくさんのマルクス／エンゲルスの著作が日本語の翻訳で出回るようになったあとで、さらに今、それに加えて二人の大型の全集が同時に着手されているのを見ることは、心が弾みます。」

これがリャザーノフの福田宛て書簡の本文だが、追伸で、「私は、貴殿が電報で言及されている、私にお送り下さった金子（441ルーブル）を受け取るわけにはまいりません。事情は自ずと明らかであります」、と記されていた⁽²²⁾。この書簡に福田がどのように対応したかは定かではない。おそらく返信をしなかったのではあるまいか⁽²³⁾。

他方、リャザーノフは、聯盟版を「認証する」とした6月27日付け電報で「アトフミ」と高野に知らせた。リャザーノフは、この約束を6月28日に果たし、同日付け書簡（Nr.17）で次のように述べている。

「……感謝を込めて貴殿の電報を拝受したことをお伝えします。貴殿がマルクス／エンゲルス著作の聯盟版を支援され、その編集に関与されている由を承りました。これは私にとって決定的でした。昨日私は貴殿に次の電報を打ちました。

『私は「聯盟版」を認証する。アトフミ』

⁽²²⁾ 1928年8月7日付けでIMEは500 Yen=442 Rubleを改造社に返却している（Nr.22）。福田が電送した（Nr.11）という900 Rubleも、実際に届いていた場合、おそらくリャザーノフは同じ措置をとっていたと思われる。

⁽²³⁾ むしろここで留意すべきは、前節で紹介したリャザーノフの激怒電報以後に流された改造社版の広告、すなわち6月29日以後紙面上に出た4つの広告ではリャザーノフの名前が消え、7月10日付けの最後の広告では、リャザーノフやIMEに代えて「特派員派遣」の文字が入り、世界各地に散在するマルクス／エンゲルスの著作探索を行い、全集の充実に努める、と宣言していることであろう。6月25日付け紙面には、聯盟5社はリャザーノフの電報、「貴殿はいずれの『マルクス＝エンゲルス全集』を支持し編集せらるるか？電報および書簡で知らせて欲しい」を掲げ、リャザーノフの聯盟版支援を推測させる広告を掲げていた。6月29日以降の広告で、改造社が、リャザーノフやIMEに言及しなくなったのは、6月25日付けの聯盟版のこの広告と6月27日付けのリャザーノフの激怒電報を踏まえてとった措置とみるのが可能ではあるまいか。

この電報によって、私がしたかったことは、事態の明瞭化です。今後取り組むべき諸段階の個別の課題には今日は立ち入ろうとは思いません。何よりも貴殿が『アトフミ』とされた書簡を頂戴し、そして聯盟版全集の正確な計画を入手したいのです。

しかし、現時点でも次の点を強調しておきます。私は、ある程度道義的支援を意味する聯盟版の認証の外にも、編集上の支援も提供したいと考えています。私が貴殿の詳細な計画を見ることになれば、それを補完する提案に踏み込むことが出来ます。確かに既に印刷刊行されたものではありませんが、今日では全く忘れ去られているか、知られていないマルクス／エンゲルスの、日本や東洋で特に関心を惹く論文がある程度纏まった数あるのです。ほかに、草稿のままになっている未公表の、私見では、聯盟版のような大きな全集では不可欠な論文があります。今後連絡を密にするなかで、向こう1～2ヶ月以内に、貴殿ないしは大原社会問題研究所および聯盟5社に、どのような手順と手段によって、全集に必要な資料をお届けできるか、説明できると期待しています。

ほかに少し触れておきます。ドイツ語版全集の第1分冊の刊行後、青年マルクスの分厚い詩集の束があることに気づくことになりました。既にメーリングが見出し、今や所在不明のものとなった詩集ではありません。この詩集は、1837年に成立していますが、いくぶん後期のものです。単なる恋愛詩を含むだけではありません。この束は恋愛詩の試みのほかに、また劇作断片そして一幕ものの演劇さえも含まれているのです。マルクスの精神形成史にとってここには多くの価値ある手がかりが見出されます。一点だけお伝えすると、ヘーゲルがここでは、まだしばしば『こびと（Der Zwerg）』という形容辞で呼ばれているのです！

今日はここまでにします。貴殿のご連絡を鶴首します…」

〔高野書簡〕

では高野は、電報で「アトフミ」と記した書簡でどのように述べていたのか。高野は、上記書簡作成に3日先立つ1928年6月25日付けのリャザーノフ宛て書簡（Nr.14）で次のように記していた。

「最後に日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』について。貴殿の貴重な電報を私は今月19日に東京で感謝して受け取りました。ここでこの件について、いくぶん立ち入ってお伝えします。今年の初めに東京ではほぼ同時に二つの企画が生まれました。私は、これは不要だと考えたので、並行して進んでいた二つの企画を何とか一つの企画に取り纏めることは出来ないかと本当に一生懸命努力しました。というのも、いずれの側にも私の知り合いがたくさんいたからです。しかし残念ながら、結果は無益なものとなりました。ザハリヒな、また個人的な理由からですが、このことを貴殿に説明するには相当細部に立ち入ることになるので致しません。結果的には、私には全く嘆かわしいことでしたが、二つの商売上対立し、強力なライバル関係にある企画が生まれてしまったのです。両者いずれも20巻からなる『マルクス＝エンゲルス全集』（1巻あたり500～600頁強）を刊行するとしています。一つは改造社、著名な月刊誌『改造』の版元から刊行されます。この改造社版全集には私も寄稿をします。しかも、エンゲルスのものの翻訳です。というのは、確かにこの企画には数名の、たとえば高島氏などのような、反動的な人物も関与していますが、この企画には私の多数の同人も関与していて、二つの全集企画が並立する前に、彼らから協力を要請されていたからです。ほかに、私と全く同じ理由から、

森戸氏も私と同様翻訳を一点寄稿することをお伝えしておきます。これとは別の全集というのは、5つの聯盟した出版社によって企画されているもので——したがって「聯盟」版と呼ばれていますが——、その中にはわが研究所の機関誌の版元である同人社が入っています。この理由からわが研究所は聯盟版により大きな関心を寄せ、これを支援しなければならないのです。この全集企画には、河上肇教授の『資本論』の翻訳——これは改造社版における高島氏の『資本論』に対抗するために入ったもので——、わが研究所による『剰余価値学説史』の翻訳が含まれます。ほかのマルクス/エンゲルスの著作はあらゆる分野のわが有能な同人によって訳出されます。主要な編集責任者は5人からなります。すなわち、河上肇氏、大山郁夫氏（前早稲田大学教授、最近まで労農党総裁、この党は残念ながら政府によって解散させられました）、櫛田民蔵氏、森戸辰男氏、そして私で、この編集委員会から委任され、わが研究所が全体の編集を行い、企画に全責任を負うことになります。

私たちはベストをつくし、この全集を可能な限り完璧なものとし、翻訳を遺漏のないようにし、最善を尽くします。こうした目的を達成できることを期待しています。そこで貴殿にお願いしたいのは、(1) 貴殿から貴重な、学術的注意と示唆を与えて下さること。(2) 貴殿の研究所で刊行されているMEGA第I部門第1巻を翻訳することをお許し頂くことです。この場合、日本語への排他的な翻訳権を頂戴したい、ということではありません。その単なるお許しです。一言で言えば、私が、わが研究所を代表して、貴殿にご容赦頂きたいのは、——いま少し言えば、ということですが——わが『マルクス＝エンゲルス全集』の編集を貴殿が支援する用意があること、このことを折り返し、電報でご連絡頂きたいのです。……」

[小括]

以上が、熟慮を重ねた上でのリャザーノフおよび高野の問題に関する最も纏まった証言である。これから、二人のこの問題に関する対応、ないしは基本的な考え方として、次の2点を指摘できよう。

第1は、リャザーノフは、モスクワIMEの所長として、改造社版『マルクス＝エンゲルス全集』ではなく、聯盟版『マルクス＝エンゲルス全集』の編集・翻訳計画を認証し、これを支持し、必要な援助を与えることを約束した。リャザーノフのこの決断にはコミンテルンや日本共産党の支援要請の関与が一方にあった。しかし支援を約束する上記書簡や前節の山本實彦や福田徳三とのやりとりを踏まえると、この決断の根本には、政治的な思惑には決して解消できない原則的な観点があった。すなわち、バラバラに単行本で翻訳を出すのではなく、系統だった大型の全集スタイルで翻訳を出版すれば、それ相当の準備が必要で、その学術的な水準を確保するには、大原社会問題研究所の研究員のような、専門家集団が編集（翻訳著作、草稿、書簡の選定や配列など）し、翻訳に関与する必要がある、そうして初めて翻訳術語の統一や解題、注記に万全を期すことが出来る、という信念であり、この信念に照らせば、この事業は商業的出版社が、もっぱら「売らんかな」の精神で取り組んで満足なものができるはずがない、翻訳権に関する手数料の多寡など問題にならない、要はきちんとした計画、それを支える体制が必要であって、大原社会問題研究所がバックにある聯盟版ならそれも可能である、という原則的な観点であろう⁽²⁴⁾。

(24) 既述のコミンテルン第5回大会の決議案はリャザーノフが提案していた。しかし、リャザーノフについて

第2に指摘しておくべきは、高野の考え方である。日本語で出す最初の『マルクス＝エンゲルス全集』を学術的に信頼できるものにしたい、という原則から高野も出発していた。しかし、高野の場合、聯盟版編集の具体的内実を知悉するだけに、それに徹しきれない思いも交錯しているように見える。要望の第(2)が、(旧)MEGA第I部門第1巻の「排他的な翻訳権」を求めるのではなく、「単なる」許可であったのは、改造社は既に6月24日に第1巻の配本を開始したという広告を打っており、この書簡を認めた6月25日に、改造社は、第1巻の「再版出来」、「第一回配本に對し賞讃と感激の聲に充つ。即日初版賣切、大衆の此の壓倒的支持は何を語る？創意者の周到な準備になる本全集の完璧は絶対に他の追隨を許さず」という広告を打っていたが、聯盟版は第一巻の出版さえ、まだ確実視できる状況になかったからであろうか。

6 聯盟5社の「配本遅延広告」、駐日ソ連大使トラヤノフスキーの証言

1928年7月5日付け、K.Omra発信、D.リャザーノフ宛て書簡(Nr.18)では、6月18日付け東京朝日新聞の広告に関して、直ちに對抗措置を執るよう依頼している。

【K.Omraの7月5日付け要望】

K.Omraは、広告によれば、リャザーノフは個人的に電報を送り、改造社版を認証し、追加的資料の提供を約束したと、広告内容を要約した後、「この種の脅しが前からあると思っていたし、改造社なら人気取りのためならどんな方法でもやっつける可能性がある」と述べ、対抗手段として次の3点を要求していた。(1)聯盟5社ないしは大原社研に電報を打ち、IMEは聯盟版を認証したこと、そしてそのことを聯盟5社に、直ちに新聞で公表するようにさせること、(2)ブラウダないしはイズベスチヤ紙にIMEの名前で手短な声明を出すこと、確実に日本の通信員はその報告を行うようにすること、(3)東京のソ連大使館気付でSpalbin (Spalvingk)に電報を打ち、IMEは改造社版を認証せず、聯盟版を認証していることを伝えること。

K.Omraが、広告では明示されていないSpalbin (Spalvingk)を名指ししているのは意外だが、この種の内部通報は当然あったとみてよいであろう。リャザーノフの返信は伝承されていない。書簡末尾で、K.Omraは、1週間以内に日本の代表団が来るので彼らとリャザーノフを訪ねると記しており、この面談でリャザーノフの考えが示された可能性がある。K.Omraの要望は、事実上既にリャザーノフ自身が6月半ばから末に、改造社(福田)や高野に対して電報および書簡で行っており、

いえば、各国共産党との協力よりはむしろ適切な研究所との協力によって——その研究所が社会民主党の傘下にあるかどうかとは無関係に——、こうした著作集の完成をはかろうとしていた。いわゆる旧MEGAは——改造社と聯盟5社が何よりも翻訳底本にしようとした国際版『マルクス＝エンゲルス全集』——は、フランクフルト・アム・マインの社会研究所——大原社研が設立の際、その範とした研究所——の協力無しには企画すら満足にできなかったと言って良い。この研究所とモスクワ・マルクス/エンゲルス研究所とのタイアップは、まさにリャザーノフのイニシアチブが成し遂げたものであった。旧MEGAに関する同研究所の関与の詳細は、Vgl., Rolf Hecker, *Erfolgreiche Kooperation: Das Frankfurter Institut für Sozialforschung und das Moskauer Marx-Engels-Institut (1924-1928)*. In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung Neue Folge Sonderband 2*, Argument Verlag Hamburg, 2000.

この問い合わせそのものはリャザーノフにとって、特に驚くべきものではなかった、と思われる。むしろ、リャザーノフにもっとも気がかりであったのは、聯盟版のその後であった。

前節後段に掲げた高野の書簡を7月11日に受け取ったリャザーノフは、7月12日付けで高野に短い書簡(Nr.21)を送る。この高野発信書簡には聯盟版の見本刷りが入っていたからか、最初にリャザーノフは、日本語で書かれたものを送るなら、せめて西ヨーロッパの言語でサマリーを付けて欲しい、と注文をつけた上で、「私が貴殿宛に出した6月28日付け書簡に対する貴殿の返答が既に投函されていることを祈って」、筆を置く、と記している。

リャザーノフからすれば、この書簡は相当心外であったと思われる。大きな期待と確信を持って大原の聯盟版を支援する電報を打ち、28日書簡では改造社には秘匿していた(旧)MEGAの続く構想の一端まで示し、便宜を図ることを約束したのに、届いた高野の「アトフミ」書簡では、支援要請の内容は道義的なもので、単独の翻訳権付与にも踏み込んでいなかったからである。

【聯盟5社の配本遅延広告】

聯盟版は7月10日を第1回配本日にしていた。しかし、聯盟5社は予定していた配本日の4日後、7月14日(土曜日)に「聯盟版 マルクス・エンゲルス全集 第1回配本について」という広告を出す。この広告は東京朝日新聞では第1面右トップに掲げられていた。配本遅延の謝罪広告であった。ここでは、リャザーノフの6月27日付け電報(「私は『聯盟版』を認証する。アトフミ」)は、配本遅延を合理化する文脈で用いられていた。以下にその全文を掲げる。

「マルクス・エンゲルス全集はマルクス・エンゲルス研究所が國家事業として全努力を傾けてなほ未だ完成せず、新たに多くを加へ幾多の改變を必要とする。故にこの全集の刊行は同研究所の支持なくしては正確なる端緒をすら掴み得ないものである。去月三十日同研究所長リアザーノフ氏は我聯盟版にその研究の成果についての権利を委ね且つ支持する旨の電文を寄せた。これ我聯盟版が眞に學問的良心に立脚せることを世界的に認められたる明證である。我聯盟版のみを支持せらるゝ讀者諸君と共にこれを喜び且つ誇りとすると共に我等は責任のさらに重大なるを感じてゐる。

従つて既に七月十日配本の豫定なりし第一回配本は翻譯者翻譯委員編輯主任諸氏の異常なる努力にも拘わらず、稿を更め校正を考覈すること十數回に及び、遂に第一回の配本に限り三十日間延引するの已むなきに至った。唯我等が内容に對する絶対的確信を益々高めつゝあることを諒とせられこの延引を寛容されんことを乞ふ。

なほ第二回配本以後は豫定に従ひ刊行しうの確信を有することを表明するものである。」

聯盟版がリャザーノフの支持表明を配本遅延の理由 — このときは「事実上の」というべきだが — にしたのは、実はこれが2度目であった。「貴殿はいずれの『マルクス＝エンゲルス全集』を支持し編集せらるるか?電報および書簡で知らせて欲しい リャザーノフ」という6月18日付けの電報は、6月25日の聯盟版広告に組み込まれ、広告はこれに「確乎たるこの事實は何を意味するか?」と続け、リャザーノフが支持するのは聯盟であることを暗示した上で、当初予定していた6月25日の締切延期を告知する。「聯盟はこの世界的認識のもとにあらゆる責任を負ふて締切を延期した。その理由は近く實物を手にせらるゝ諸君の必ずや諒とせらるゝ處であらう」とし、それまでの広告では、第一回配本を6月末としていたのを延期し「配本七月十日」としたのであった。改造社は

リャザーノフの権威と支援約束を — リャザーノフによって否定されたものだが —、あくまで全集の内容充実に資するという文脈で用い、改造社も一度は延期をしていたが、6月24日には第一回配本を終え、聯盟版が延期して第一回配本日とした7月10日には、第一回配本分について「初版、再版三版賣切、四版出来」と報じ、「全民衆の大歡呼裡に 本日メ切」を唱い、「次回配本の偉觀を觀よ!!」という広告を打ったのである。

両者は商業主義的競争の枠組みのなかで顧客争奪をしていた。改造社版の内実を知る一部の識者や聯盟版直近の関係者ならともかく、広告のキャッチコピーを字義通りにとった一般の顧客には、「内容的に大差のないものが2つあるなら、2度も配本延期を広告して期待を裏切る全集よりは、既に刊行された全集を手にしよう」、ということになるのは必然的である。したがって、聯盟5社が7月14日に2度目の配本延期を広告した時点で、聯盟版の命運は完全に尽きた、というべきであろう。

リャザーノフの手許には、駐日ソ連大使トラヤノフスキーから次の書簡が7月25日付け（推定）で届いた。

〔トラヤノフスキー書簡〕

「リャザーノフに。大原社会問題研究所及び共産党をさまざまな出版社のために仕事をする研究者グループと混同すべきではないと思われます。あれやこれやの出版社が等しく、改造社の、また聯盟版のマルクス／エンゲルス著作出版のために働いています。私はいずれか一方にけしかけようという気はありませんが、改造社を支持しています。理由は、改造社はわれわれの役に立っているからです。『資本論』を10万部発行しましたし、『マルクス＝エンゲルス全集』の第1巻を刊行し、2万もの予約者を募ったからです。聯盟版が独自の全集を発行できるかどうか私には訝しく映ります。2つの全集を一本化する可能性はあり得ないでしょう。両全集を支援する必要があります。さもなければ改造社版だけが存在することになります。ところが貴下の研究所は事態を傍観視しています。これでは全集は個々の研究者のためにはならないし、これでは事態は、事柄そのものについても、迫害の脅しをかけられながら全集を予約した読者にとっても、深刻になる一方ではないでしょうか。」

この書簡から、改造社側の強い働きかけがトラヤノフスキーにあったことが分かる。トラヤノフスキーには翻訳の善し悪しやその担い手には全く関心がない。しかし、この書簡は、1928年7月末という時点の状況認識としては、K. Omraらコミンテルン関係者よりも、極めてリアルである⁽²⁵⁾。

(25) この書簡に対応するのがD.リャザーノフの電報草案（Nr.23,24）である。一方が手書き、他方がタイプの手書稿だが、タイプの手書稿には手書きで「送付されず」とドイツ語で記されている。文面は次の通りである。「貴殿が私から何の事前了解もとることなく、さっさと改造社に一面的に肩入れされたのは、私には不愉快です。二つの競合する企画の一本化のために働いて頂きたい。一本化がなされない場合、私は大原社会問題研究所によって、また日本共産党によっても支持されている聯盟版を支持します」。

エピソード

[リャザーノフの督促]

リャザーノフは高野の返答を待った。既に聯盟版の命運は尽きていたが、高野は8月18日に、リャザーノフの6月18日、27日付け電報と28日付け書簡に礼状(Nr.26)を認め、リャザーノフの支援申し入れにどのように答えるかは、まだ確たることを伝えることが出来ないと詫びている。この書簡を9月20日に受け取ったリャザーノフは、10月1日付けで返信(Nr.28)し、改造社から日本語版『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻の献本があったこと、しかし「日本語のために」内容[目次]は無論、翻訳の質については全く不案内なので、高野の意見を教えて欲しい、そうすればロシア語ないしはドイツ語版の*Marx-Engels-Archiv*で内容の紹介が可能となる、と述べ、「残念ながら聯盟版については全く何も伝わってこない!」と嘆じ、状況を知らせるように要請している。11月15日付け書簡(Nr.29)では、リャザーノフは高野の改造社版全集に対する見解を重ねて要望し、「貴殿は既に聯盟版に関する諸々の新たなことをご承知ではないか」と畳み込んでいる。

聯盟版の挫折を、リャザーノフは別のルートから知ったのであった。S.Nobori教授(漢字表記、所属不明)が(おそらく10月に)リャザーノフを訪問し、5社聯盟の「解体」を伝えていた。1928年11月17日付け書簡(Nr.30)でS.Noboriは、再度聯盟5社は今に至るも1冊の全集も出版していないし、最終的に聯盟が解体した、だが、改造社版は既に3巻が刊行されたというのである。

[高野の「挫折」通知]

高野がリャザーノフに聯盟版の挫折を伝えたのは、あけて1929年2月19日付け書簡(Nr.37)においてであった。

「たいへん残念ですが聯盟版、日本語版のいわゆる『マルクス＝エンゲルス全集』は、完全に挫折しました(ganz gescheitert)。しかも主要には書店の財政事情からです(余りにも少ない予約件数、余りにも少ない費用)。2巻分の草稿は印刷可能になっていましたが。ですから私は貴殿の学術的支援を徒に要望していたわけで、心よりお詫びしなければなりません。また私は、既刊の改造社版の諸巻に関する私の論評を控えて参りましたが、これは、聯盟版が終わってしまった企画であったとはいえ、改造社版が聯盟版に競合する企画であったからです。」これに対して、リャザーノフは1929年3月8日付けで、次の返信(Nr.39)を送った。

「ようやく貴殿からマルクス／エンゲルス著作のいわゆる聯盟版の最終的な挫折に関するたいへん残念な報せを拝受しました。貴殿が示唆されていたように、貴重な学術的準備が既に行われていただけに、大きく悔やまれます。またお言葉から改造社版の質についてはあまり良くないと推察されますので、なおさら悔やまれます。

とはいっても、誰しも、事態が必ずしも悲惨にならないようにと、希望したいのですが。」⁽²⁶⁾

⁽²⁶⁾ このリャザーノフの「改造社版の質についてはあまり良くないと推察されます」という評言に接し、服部文男(東北大学名誉教授、1923-2007)は、「マルクス／エンゲルスに関するさまざまな研究が非常に進捗している」現時点からみた場合、と断った上で、インタビューしたRolf Heckerに次のように述べたという。

以後、高野とリャザーノフがこの件でやりとりをすることはなくなった。

「改造社版は「全集」ではなく、「日本語版マルクス/エンゲルス文献集」の域を超えない」

高野の上記「挫折」通知では触れられていないが、第1節で記したように、5社聯盟は1928年9月10日に解散していた。大島清によれば、事後処理の協議中に山本實彦が現れ、高野らが資金の融通を要請したところ快諾されたという⁽²⁷⁾。聯盟版との競争に山本は勝利したが、内心は穏やかではなかったのであろう。8月に続巻を刊行したものの、第2巻ではなく第12巻であり、全集完結の自信は必ずしもなく⁽²⁸⁾、IMEの支援見込みも覚束ない以上、改造社版の翻訳者に名を連ねている高野の援助を得たかったのであろうか。

大島によれば、事後処理協議は約1年を要したという。最終的には、聯盟版に組み込まれる予定であった翻訳原稿が一定数改造社版に入り、改造社版全集は予定を3年超過して1933年に完結する（本全集は、1935年に「補巻ノ1」が出ている）。翻訳の出来不出来は措くとしても、完結したこの全集はおおよそ学術的「全集」とは言い難いものであった。何よりもどのようなコンセプトで編集するかが全く明確ではなかった。マルクス／エンゲルスのどの著作、草稿・草案、書簡を、何を基準に収録するのか、どのように配列するのか、書誌情報をどのように、またどの程度組み込むのか、解題、注解（訳注を含む）、索引はどうするのか、個人全集では編集刊行前に決定しておくべき余りにも自明の諸点が明確ではなかった。そもそも、これらに関わる編集者の「序文」（総序）がこの「全集」には存在しない。収録文書の範囲や点数は、全集完結後初めて確定するという為体であった。訳者の都合で、収録巻が変更された事例もあった⁽²⁹⁾。訳文訳語、術語、さらに訳者間の統

「翻訳は——それを進めたのが若い学者だったのでなおのこと——困難を極めました。マルクスの学位論文も私の父によって翻訳されたのですが、当時父は、まだ学生だった父の弟の助けを借りて翻訳を仕上げたのです。そのときは非常に悪かった、と思います。戦後、著名な哲学者、東京大学の出隆教授が、自伝でこの翻訳を批判しました。……」（Rolf Hecker: *Zu den Beziehungen zwischen den Moskauer Marx-Engels-Institut und dem Ohara-Institut für Sozialforschung in Osaka*, In: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. Neue Folge. Sonderband 1*, Argument Verlag, Hamburg, 1997, S.100.）ここで服部が言う「父」とは服部英太郎東北大学名誉教授（1899–1965）であり、その「弟」は服部英次郎名古屋大学名誉教授（1905–1986）である。

Noboriの紹介で改造社版の構成に接したリャザーノフは「頂戴した内容目次にちょっと面食らいました。この目次から、改造社版がどのような原則で組み立てられているのか、全く何のイメージも湧いてこないのです。既に3巻が刊行されている全集が、それぞれの巻について、一個の確定した計画を纏めたものだと考えるなら、私はあなたに全集の全体計画を送って欲しい、とお願いしていますが、そこに何か大きな期待を持っているわけではありません、過大評価は禁物です」としている（Nr.33, 1928年12月29日付け, Nobori宛）。

⁽²⁷⁾ 大島清前掲書, 276–277ページ, 参照。

⁽²⁸⁾ 奥付を見ると、改造社版全集の刊行順は1, 12, 4, 5, 6（1928年）2, 7, 11, 3, 7.3, 13, 8（1929年）、等々であり、乱数表を見るが如きであった。

⁽²⁹⁾ 例えば、『ドイツ・イデオロギー』は、改造社版では当初①「フォイエエルパッハ」章ほかを森戸辰男が、②「ライブチヒ宗教会議」を土屋喬雄が、③「聖マックス」ほかを服部英太郎が訳出し、第3巻に収録する予定であった。しかし印刷版では、①は森戸と新たに聯盟版から加わった櫛田民蔵が、②は土屋が、③は桑田梧郎と轟三郎が代役を務め、①および②は第15巻に、③は第7.2, 26, 27巻に分載されている。この配列に学術性は微塵もない。

一もないまま作業は進展した。この詳細、正確な評価は別稿に委ねるが、改造社版は、「全集」と銘打っているものの、実態は（甚だ使い勝手の悪い）「日本語版マルクス／エンゲルス文献集」の域を超えるものではなかった。この主たる原因を、黎明期にあった日本におけるマルクス／エンゲルス研究や編纂学の未熟さにのみ帰するわけにはいかない。それと同時に、あるいはそれ以上に、重視すべきは、学術研究とは本来無縁の、コミンテルン、日本共産党によるプロパガンダ、および社会民主主義者への敵視路線、それに対抗する諸勢力の動向、そして何よりも「売らんかな」を社是とする改造社の商業主義、これらの角逐であろう。

（おおむら・いずみ 東北大学大学院経済学研究科教授，Mitglied der Redaktionskommission der Internationalen Marx-Engels-Stiftung（国際マルクス／エンゲルス財団編集委員））

[謝辞]

本稿の作成で、Dr. Valerij Fomichev（ロシア国立社会＝政治史アルヒーフ、マルクス／エンゲルス部門長）から、関連文書の探索、撮影、送付で大変お世話になった。Prof. Dr. Rolf Hecker（社団法人・ベルリンMEGA刊行促進協会理事長、ベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー研究員）には、ロシア語文書の解説とドイツ語訳をお願いした。森田直子准教授（東北大学情報科学研究科）、窪俊一准教授（東北大学情報科学研究科）、Prof. Dr. Frieder Sondermann（東北学院大学教授）には仏語文書の解説と独訳、日本語抄訳をお願いした。また窪准教授には独文文書の翻訳点検をお願いした。記して感謝の意を表する。

●戦後の人権、平和、民主主義はどのように形成されてきたのか

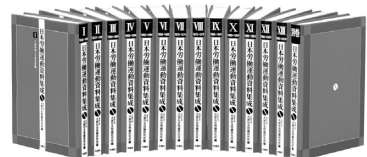
日本労働運動資料集成

全 13 巻 + 別巻（索引・統計資料）

全巻揃い定価 411,600 円（本体 392,000 円 + 税）

戦後60年にわたる日本労働運動の歴史!!

大原社会問題研究所が所蔵する膨大かつ貴重な
史・資料を体系的に集大成。



法政大学大原社会問題研究所 編

旬報社

〒112-0015 東京都文京区目白台2-14-13
TEL. 03-3943-9911 FAX. 03-3943-8396

E-Mail
info@junposha.co.jp